

聖地



ウロコのないホセ

ウロコのないピラニアのホセは、
ある日、父親にうらみをぶつけた。

父さん、どうしてぼくにはウロコがないの？

ホセよ、よく聞け。
おまえは逆子で生まれてきたから、
ウロコは全部、母さんのおなかのなかさ。

ホセはいつも仲間はずれだった。
おまけに野太いヒゲが生え、
ついには、自分がナマズであることを知った。

父さん、ぼくはどうしてナマズなの？

ホセよ、よく聞け。
おまえは出世魚なんだ。
いずれ、勇敢なピラニアになる。
海へ向かいなさい。

ホセは父の不貞にも気づかず、
アマゾン河を下り、海に出た。

海水はウロコのない身体を
容赦なく痛めつけ、
ホセはついに小魚たちの餌となった。

死の直前、
ホセの身体は腫れ上がり、
イルカのように巨大化していた。

イルカたちは言った。
ヒゲをたくわえたホセに言った。
わが友に栄光あれ、と。
父さん、ぼくはとうとう...

免罪符

死の商犬・流れ者のジャックは、
罪深き犬族の弱味につけ込み、
大量の免罪符をばらまいた。

これは神からの賜りものである。

十字架が刻まれたその骨に、
犬たちは深く救われ、
ジャックは町長としてその町に迎えられた。

ジャックは町にサーカスを呼び、
各犬小屋に井戸を掘り、あてがった。

ある日、自分の倉庫を訪れると、
職犬が困った顔で言った。

もう材料の骨がねえです、だんなさま。

そこでジャックは最後の一本を、
懐に収め、町を逃れた。

のちに、犬たちは、自分たちが、
免罪符とはいつわりの、
ただの骨をつかまされていたことを知り、
ジャックへの怒りと、
免罪符を頼みに犯した罪におののくが、
死の商人パウルという人間がこれを収める。

パウルは棒切れに十字架を掘り、
これを犬たちに与えた。
これが家畜化された犬族にとって、
「棒切れ投げ」という、
最高の遊びとなった起源である。

----ドグペディアより引用

カマキチおじさん

ウイスキーを飲んでいると、
目がまわってまわって。
裏の泉に水を汲みにいったら、
みなしごハッチに出会いました。

カマキチおじさん、いつ片目が治ったの？
ハッチはぼくの片目を撫でて、泣きました。

ウイスキーの水を汲んでいたら、
めがまわってまわって。
思わずウイスキーのピンを
泉に落としてしまいました。

カマキチおじさん、片目を奪ったお詫びに、
ハニーバーボンでもご一緒しませんか。

ハッチよ、ぼくはもう酒はいらないよ。
だから、おまえの最後の一刺しを
ぼくのハートに捧げてくれないか。

自由な世界

夜中に。

舌を切られた文鳥がさえずり、
羽をむしられたトンボが空を舞う。
ようこそ、ここは自由の世界。

昼間に。

弦のないハープが子守歌を奏で、
水のないプールで、子どもたちがクロールを競う。
そう、これが自由な世界。

こんな世界だったら、
僕が君を愛したって、
ぜんぜんかまわないだろ。

マンション犬ジョン

八階に住むマンション犬のジョンは、
六階の排水口に住むネズミのハリーに告げる。
二十四時間以内にこのマンションを退去すべしと。
そのはらいせにハリーは、
五階以下のゴキブリのハドソンファミリーに厳命した。
三時間以内に一族の処刑裁判を決行すると。
一族は判決を待たずに逃亡した。
ジョンは名実ともに、
マンションの陰の支配者となったが、
テレビゲームに夢中の飼い主・ななこちゃんは、
ジョンの散歩をすっかり忘れた。

予言

そのときには、星が墜ちるだろう。

そのときには、ラッパが吹かれるだろう。

そのときには、ぼくときみは空に投げ出されるだろう。

そして、ぼくたちのつないだ手と手は振りほどかれるだろう。

ちいさくなっていくきみ、

そらに吸い込まれていくきみ、

目と口を大きく見開いたきみ。

別れの挨拶もなし、

さようならの涙もなし。

やがてくる静謐。

やっとぼくらはひとつになれたんだね。

おとうさんのうた

ぼくの足をかんだ犬を蹴り飛ばしたおとうさん。
グローブの穴にタコ糸をくくりつけたおとうさん。
公園のベンチでコカ・コーラの栓を指で引きちぎったおとうさん。

おとうさんは凶暴になって、会社を辞めて、
きれいな女の人と韓国旅行に出かけて、やがて元気がなくなっていったね。

ぼくが結婚したとき、ニセモノのカルティエをくれた、
子どもがうまれたとき、豪勢な詩を贈ってくれた、
妹の結婚式のあと、行楽地で馬にまたがった姿は將軍そのものでした。

家を取られ、カツラをはずして、
あとは笑っていただけになったね。

もう少しです。
ぼくがおとうさんに寄り添うのは。
もう少しです。
ぼくがおとうさんをかっこよく抜き去るのは。

聖地

イモ虫のイモ吉くんが、
半日かけて地べたを1メートル進んだとき、
青ガエルのケロ郎くんは、
先に行くイモ吉くんに追いつきました。

「これはこれは、
『あの地』へ巡礼ですか」
ケロ郎くんは明るく声をかけました。

「はい、半年計画です」
イモ吉くんは無邪気に答えました。

1か月後、
ケロ郎くんは「あの地」からの帰り道に、
「あの地」へ向かうイモ吉くんに再会しました。

「『あの地』はどうでした？」
イモ吉くんが問うと、
「はい、極楽でした」
ケロ郎くんが答えました。

極楽かあ。

イモ吉くんはその聖地を夢想しつつ、
1ミリずつ前へと進みました。

聖地まであと2メートルのところで、
イモ吉くんはさなぎになりました。

蝶になったイモ吉くんは、
2メートル先の聖地のことなんか忘れて、
美しい翼を広げて、青空の彼方へ飛び去りました。